『ザディーグ』にみられる「幸福であることの難しさ」について

竹　田　順　子

ウンベルト・エーコの小説『薔薇の名前』の主人公，バスカヴィルのウイリアムなる修道士は読者の前に姿を現すや，何も知らされていないのに，修道院長の愛馬がいなくなったことを見抜き，まだ見たこともないその馬の姿形を言い当ててみせる。主人公の鋭い推理力を示すためのこの冒頭のエピソードは，ヴォルテールのコント『ザディーグ』第3章を踏まえたものである。

ザディーグは，生まれも育ちも性格も良く，裕福なうえに友人にも健康にも恵まれているという希有な資質の備わった登場人物である。自分でも〈幸福〉になれるものと信じているのだが，次から次へと運命の手ひどい仕打ちにあって，いっこうに幸福にたどり着くことが出来ないという，単純で明快な筋だての物語の主人公である。不幸のはじまりは結婚を言い交わした女性の裏切り，次は二人目の女性との結婚生活の破綻。そして三度目の不幸の発端が上に述べたエーコの小説に組み込まれている部分である。「神が我々の目の前に置いて下さったこの（自然という）偉大な書物」[1]を読むことこそが〈幸福〉への道であると信じたザディーグがユーフラテス川のほとりの田舎の家にひきこもって研究生活を送り，人よりも優れた洞察力を身につけるが出来た。その結果として，ある日散歩の途中，問われるままに答えたのは，見たこともない王妃の雌犬と王の馬の，姿やありさまについての余りにも詳しい説明であった。『薔薇の名前』の主人公はその知恵深さによって難解な殺人事件を解きほぐすことに成功するが，我らの主人公はかえって怪しまれ，それらを盗んだ犯人に間違われることを初めとして「運命のなせる技によって」次々と〈不幸な〉目に会うことになる。そのたびに「この世で幸福になることはなんと難しいのだろう」と嘆かずにはいられない。ザディーグが幾度となくくりかえすこのせりふが，この作品のキーワードだといえよう。

1)　ウンベルト・エーコ著　河島英昭訳『薔薇の名前』東京創元社，1990，p. 42.　並びに『ザディーグ』第三章

ヴォルテールの膨大な作品群の中で，文学作品として彼が真剣に著述に取り組んだのは，詩であり，戯曲であり，なかでも叙事詩『ラ・アンリヤード』は大成功をおさめ，次の世紀に入ってもまだ次々と版を重ねたという。が，今もなお数多く出版され，もっとも広く読まれているのはコントである。なぜコントを書いたかということについては，秘書のロンシャンの言を源にするエピソードがよく知られているが，年代的に合わないため，ほぼ伝説と化していると言ってよい。それは官憲から身を隠さねばならなかった彼が，保護を受けていたソーのデュ・メーヌ公爵夫人のサロンで，夫人を楽しませるためにザディーグなどのコントを読み聞かせたというものである。

『ザディーグ』は1747年に『メムノン』というタイトルで，翌1748年に現在の『ザディーグ』となって出版された。これに先立つ数年間，ヴォルテールの置かれていた状況が非常に困難なものであったことは，多くの研究者の一致するところである。

プレイヤード版の『ザディーグ』の注釈のなかで，ヴァン・デン・ウーヴェルは次のように述べている。「実際，このコントには1745年と1746年の両年が，強烈に刻みこまれている。当時ヴォルテールは幸福，平穏な孤独，愛情，叡知というようなものの，シレーにおいてぼんやりと見えていた理想の形と，予測できない気まぐれな展開を見せる生活の現実との間には隔たりがあることを，苦い経験を通して理解していた。」[2)]

ルネ・ヴァイヨによれば[3)]，ザディーグが著される1747年以前，ことに1740年から1747年にかけて，彼を取り巻く社会的，感情的な状況が大きく変化し，ヴォルテールは人間の自由というものを信じることが出来なくなった，とされている。自分の運命について苦しい思いを抱くようになったヴォルテールは，この時代ザディーグであった。

ではザディーグはなぜ，どのように不幸であったのか，なにに苦しんでいたのか。あるいはなぜ満足な幸福感をもつことができないのであろうか。

個人的問題は別にして，一般に人が不幸だと考えるのはなにか。たとえば労働の苦しみがそのひとつだろうが，これはザディーグの不幸の範疇には入っていない。エジプトの地でザディーグは召使と一緒に奴隷に売りとばされた時でさえ，「さあ，勇気を失わずにいよう。(……) 私も他の人と同じ人間なんだから，他の人と同じように奴隷になっていけないわけがあろうか。この商人は無

2) Voltaire, *Romans et contes*, Bibliothèque de la Pléiade, p. 737.

3) R. Vaillot, *Avec Madame Du Châtelet*, Voltaire Foundation, 1988, p. 346.

慈悲なことはしないだろうよ」（第十章）と，召使を慰めている。

あるいはひとは，死すべき人間の運命をおもうとき苦悩し，宗教的，哲学的に解決の安心を得ようと努めるものだが，ここにもザディーグの苦はない。ザディーグの苦しみは現世的なもの，地上のものであり，死後のことは問題とされない。ついでながら『死と啓蒙』の訳者によれば，「死に直面した態度において，この世紀で最も感動的なのは疑いもなくヴォルテールであろう。死を恐怖しながらも，理神論者として『フィロゾーフの死の原則とはなにか』を彼ほど見事に示したものはいない。文明人として，きちんと埋葬されるべきだから司祭を呼ぶが，自分が信じていないことは何ひとつ証拠になる書き物を残さず，告解もしない。彼は死に際してもキリスト教会と戦術的に戦ったのである」[4] と述べられている。『ザディーグ』の第十二章では，バルゾラの大市場に世界中からやって来た商人達が，それぞれ自分たちの信仰する神が最も尊いと言い争いをするさまがおかしく描かれている。ザディーグは仲裁に入って全員の言い分を認めてやりながら，結局は誰もが同じことを述べているのだと言ってみなを驚かせ，納得させてしまう。カタイの首都カンバル（今の北京）からきた人に，「私はエジプト人にもカルデア人にもギリシャ人にもケルト人にも梵天にも牛神アピスにも美しい魚神オアネスにも敬意を表するものであります。けれども私たちの言葉で申しますなら，恐らく『理』とか『天』というのが，牛や魚にあたるのだと思います」と言わせたうえに，ヴォルテールはわざわざ「中国語で『理』は自然の光，理性のこと。『天』は空，神も意味する」と注をつけて，この宗教論争の無意味さを突く後押しをしている。

また現世的，地上的な不幸というものを別の角度から見れば，生まれながらの不幸もまたここには存在しない。生きていくあいだに出会う不幸，人為による不幸に主人公は苦しんでいる。先にも述べたがザディーグは性質も善いうえに，健康にも恵まれ，顔立ちは感じがよい，などという具合にひとが幸福になれると考えられるあらゆる要素をもって生まれている。物質的豊かさも当然のこととして享有している。ところが普通に幸福の源と考えられている事柄が，ザディーグが幸福になることには貢献しない。

最初にあげた「王の馬と王妃の雌犬」のエピソードは，智恵や学識のありすぎることが不幸のもとになることを示していた。このときザディーグは「余りにも知識がありすぎるのは時によると何と危険なことか」と思う。同じようにグリフォンという動物について論議がもちあがると，学者達をさしおいて賢明

---

4) ジョン・マクマナーズ著，訳者代表・小西嘉幸，『死と啓蒙』平凡社，1989，p. 489.

な意見を述べたためにザディーグはあやうく串刺しの刑にされかかる。このときには「幸福は一体どこにあるんだ。この世のありとあらゆるものが，存在していないものまでもが私を責めたてる」（第四章）と嘆いている。しかしここには論理の飛躍があって，危険なのは実は知識そのものではない。学識が豊かであるがゆえに鋭い判断力を示したり，優れた意見を述べたりするザディーグをたたえるどころか，「魔法使いであるとして，火刑にすべきだ」と言う僧がおり，また告発に急ぐ学者がいるせいなのである。知識そのものは不幸なザディーグの助けとなることもあるのだから有益でもある。たとえば奴隷の身分におちたザディーグが主人のセトックに認められ，のちに彼の親友となるのは，彼が博識ぶりを披瀝してセトックを感心させたからにほかならない。

王の存在は，この作品において重要である。ヴォルテールの他のいくつかのコントと同じように主人公は旅をするが，しかしこのアラビア半島のあちらこちらをめぐる旅は自ら好んでするものではない。自分を殺そうとしている王から逃がれるために，都バビロンを出て行かざるを得ないからである。王との関係悪化がもととなってその後の主人公のかずかずの不幸が生まれることになる。そもそもザディーグが御前に上がるのを許されたのは，王を称える四行詩を即興で作ったところ，それが偶然王の目に留まったからである。実際に作者ヴォルテールもその時代の人々の目には「偉大なる詩人」とうつっていたことであろうし，王に認められたい気持ちも強かったと思われる。ポモーは雑誌 *L'Infini* の対談記事のなかで[5]「偉大なる王のもとで偉大なる詩人になること」がヴォルテールの望みであったと述べている。王と王妃の御気に入りとなったザディーグは「幸福になることはそんなに難しいことではない」（第四章）と思いはじめ，最も高邁な心の人に与えられる盃を王から賜ったときには「とうとう幸福になれた」と言う（第五章）。そしてついに王から総理大臣に任ぜられると，感謝しながらも「こんなおかしな幸福はすぐに消えてなくなるかもしれないなあ」（第六章）と思わず不安が口をついて出る。ヴェルサイユの宮廷にあこがれをいだき，またプロシャのフリードリッヒ大王のもとに喜びと期待をもって行ったものの，いずれも思わしい結果とはならなかったこの時期のヴォルテールの心情がここにはっきりと表れている。

ザディーグが総理大臣になれた直接の理由は，おうむに窮地を救われたからなので，そのことをさして「こんなおかしな幸福」と言っているのだが，ザディーグを襲う不幸は，幸福であるがゆえに不幸になるということをはじめと

5) 《Voltaire, de son temps au nôtre》, in *L'Infini* N° 25, Gallimard, 1989, p. 31.

して，すべておかしな原因によっている。どのように考えても理不尽な仕打ちによって主人公は不幸な境遇に落とされる。理不尽であればあるだけ主人公をやる方なくさせる抗いがたい〈運命〉を感じさせるし，同時に理不尽ゆえのおかしみに読者は苦笑を誘われる。〈運命〉の理不尽さはザディーグ＝ヴォルテールのいらだたしさを示すものであると同時に，作者ヴォルテールからのコントの読み手へのサーヴィスでもある。

理不尽さの最たるもののひとつは，善いことをしているのにひどい目に合う，というものである。善いことをして報われないのは世の習いとも言えるが，ザディーグの場合はあべこべに一層手ひどい目にあわされる。たとえば殴られている女（ミスーフ）をたすけてやると奴隷にされ（第十章），夫が死んでその遺骸とともに火あぶりにされようとしている未亡人（アルモナ）を救うと，自分が火あぶりにされそうになるのである（第十一章）。だがザディーグを陥れる本当の理由は，この場合はっきりしていて，初めの例ではミスーフを殴りつけていた男をザディーグが争いの後に殺してしまったことは正当防衛だと認められたのにもかかわらず，法律の定めによっておかしなことに「一人の男の血を流したことで有罪」となり，奴隷にされる。後の例では，未亡人たちを火あぶり台に送りこめなくなって，ザディーグを恨みにおもう僧侶たちの告発を受けたからである。善いことをしたのにひどい目にあうのは，おかしな法律やら悪い僧侶やらのせいであって，理不尽さはまさにここに在るのである。それゆえこういった場合の不幸というのは〈運命〉という抽象的なものによるのではなく，やはりあくまでも人為的なもののせいなのである。

しかしザディーグ＝ヴォルテールは，法律や僧侶が間違っているのだ，と言い定めることはしない。ほんとうの理由ではないものをあげて，自分の不幸を嘆いて見せるのは，上にも述べたように〈ずれ〉によるおかしみを読み手に与える。と同時に，目標をまっすぐに狙う攻撃はせずにおいて，その実どこに目標があるかははっきりと示す作者の戦略でもある。だがヴォルテールの初期のコントであるこの作品では，後期のコントに比べて攻撃的性格はまだ弱い。主人公ザディーグの行動に限界があり，弱さがあることを示すものでもあると思われる。

そして「どうあがいたところで（sans ressource），不幸になるべく自分の星によって運命づけられている」（第十七章）と言うザディーグは，幸福になるための方策がない（sans ressource），どのように行動すべきかがまだ分からないと言えるのではないか。そういう意味でもザディーグには限界や弱さがある。まだカンディードのように「庭をたがやす」ことに思い至らないのである。

何かことが起こるたびにつかの間の幸福感にひたることはあっても決して長続きせず，必ず手痛い目にあい，毎回異なったやり方で殺されそうになるザディーグは，それゆえにしばしば憂鬱な思いにとらわれる。「人生とはいったい何なのだ。(……) 私のした善いことはいつだって不運の種となったし，私が栄華の極みに上ったのもただ，世にも恐ろしい不幸の深みに落ちるためであった。もしも私が他の多くの人たちのように邪悪であったなら，私もその人たちのように幸せでいられるものを」(第八章) というような嘆きをひとつの例として，いたるところで同じような絶望の言葉が繰り返される。繰り返し表現の面白さとともに，この時期にヴォルテールは相当の憂鬱感にさいなまれていたのではないかと察せられるほどである。そしてザディーグに弱さが感じとれるのは，憂鬱感にたびたび見舞われ，うちのめされたからであるに違いない。

したがってザディーグの生き方は，自ら進んで他に働きかけ道を切り開くというのではなく，まわりの変化に対応する受動的なものとならざるをえない。しかし波のように繰り返し押し寄せる憂鬱な思いに今にも押しつぶされそうになり，絶望の極みに押しやられても，ザディーグの行動や言葉に「死」を実感させるものはまったく無い。それはザディーグが，得ようとしてなかなか得られない幸福を求め続けることをやめなかったからであり，幸福になれるということに希望をもち続けたからにほかならない。まさにこのことがザディーグの，弱さのなかから生み出される強さとなっている。

星のきらめく夜空を眺め，宇宙の不変の秩序に思いを馳せるとき，ザディーグの苦しみはつかの間にせよ忘れ去られる。自然のなかのかすかな点にすぎない地球，小さな泥粒の上でお互いに食い合いをしている虫けらのような人間，というイメージを思い描くことによって，自分という存在の空しさに気づく(第九章)。自分の弱さ，卑小なることを自覚することから，強さは生まれる。

山賊アルボガドの城を去ったザディーグが，自分はまるで不幸の見本のようだと嘆きながら，とある小川のほとりにさしかかったとき，「私はまちがいなく人間のなかでいちばんの不幸者だ」(第十五章) と言って川に身を投げ死のうとする漁師に遭遇する。幸福な人が不幸な人に救いの手を差し延べるのは当然のことである。ところが我が身の不運をこれほど嘆く身でありながら，ザディーグは不幸な人を見ると助けようとせずにはいられない。「不幸なふたりはちょうど弱い二本の灌木のようなもので，お互いに支えあいながら嵐にたちむかう」ものだからである。そして漁師にむかって「どうしてあなたは不幸に負けてしまうのですか」と問うてやる優しさと強さがある。

ザディーグという人物にたいして妬みや恨みや憎しみを抱く者たちが，始終

かれを悩ます一方で，まわりにはザディーグを力づける，魅力的な人々がいる。その人達の存在がザディーグに幸福への希望を与えつづけ，弱きザディーグを強き人にするのである。

いつもかれの助けとなり，「ひとりの友は百人のお坊さまよりありがたい」（第四章）ととうとばれる友人のカドール，「美しい女性から愛されている人はいつも窮地を救われる」（第十六章）と称えられる相愛の王妃アスタルテ，自分の所有する奴隷ザディーグの賢明さに魅了され親友にした商人のセトック，未亡人アルモナや唖のこびともザディーグを命の危険から救い出す。このような人々にめぐりあえる幸せがあるのは，運命というものが仮借ないように見えて，実はそれほど苛酷なものでもないということになるのではないだろうか。

ところがザディーグにとって，神は「常に私を責めさいなむ」（第十七章）ものであることに変わりはない。そのようなザディーグに人生というものの謎ときをしてみせるため登場するのが隠者＝天使ジェスラード（第十八章）である。かれはザディーグに向かって，この世のすべてのことは絶対者の意志によって取り決められていると言う。だから「人間には神の思し召しが分からず，またものごとのごく僅かな部分しか見えないのに全体を判断するなど間違っている」のだ。天使の言うことは本当なのだろうか。この世のすべてのことがあらかじめ決定されているとしたら，いったい希望はどこにあるのか。

ザディーグ＝ヴォルテールにとって，正義と自由の保証された社会が理想の社会である。したがって現在かれのおかれている状況というのはまったく承服しがたい。ジェスラードは「弱き人間よ，崇めねばならないものにたいして，議論するのはやめよ」というが，あるがままの現実を素直に認めるわけにはゆかない。とはいえ天使の言うことに，疑念はあるもののうまく反駁することが出来ない。だからザディーグは空に飛び立つ天使に向かって「しかし」という一語をしか発することが出来なかったのである。

ヴォルテールがコントを書いたとき，すでにかれは50歳を越えていた。デュ・メーヌ公爵夫人を楽しませるためであったかどうかの真偽はともかく，読む人を楽しませるために書かれたものであることはまちがいない。同時代人にはそれとすぐに理解できる皮肉や当てこすりが我々には分かりにくいものであっても，時代を越えて楽しむことのできる冗談や皮肉やからかいや，時には好色なほのめかしがここにはある。後期のコントの作品群が社会批判の鋭さを強めていくのにたいして，ごく初期のものである『ザディーグ』はアラブ世界を舞台として，エキゾチスムの横溢する楽しい読み物となっている。が，楽し

むのは読者だけではない。

ヴォルテールのコント全体を通していえることであろうが，作者自らがコントを書くことに楽しみを見いだしていたにちがいない。「コントが書かれるのはたいていの場合，ヴォルテールにとって困難で不安な時期にあたっている。だからコントを書くことが，哲学的確信をここちよく広める一手段というよりも，冷たい現実のなかでかれを励まし，心の釣合いをとらせるものとなる」と，ムナンはいう[6]。

『ザディーグ』を書いた時期の特殊な不安な状況については初めに述べたが，それらに加えてヴォルテールの肉体的状況も無視することができない。すなわちかれは一生を通じて病弱であったという点である。ド・ラルジリエール[7]やカンタン・ラトゥール[8]の描く，美しいかつらをつけて正装したヴォルテールの肖像画には快活さや聡明さが良く表れていて，かすかにほほ笑みをたたえた表情は見る人に好ましい印象を与える。が，ジャン・ユベールの描くヴォルテールの日常の様子をとらえたスナップショット風の絵やデッサン[9]をみれば，もともとヴォルテールに対する親愛の情よりも皮肉のきいた筆致をその特徴とするものの，加齢のせいばかりとは思えないほど痩せた姿や表情を見せている。すでに誕生のときに「この子は助からないだろう」[10]と助産婦にためいきをつかせ，長じて後も肉体の不調に悩まされ続けたらしい。ふたりの医学者ブレアンとロッシュによるヴォルテールの病歴を詳しく調査した伝記[11]によれば，内臓全般ことに消化器系統が弱く，そのせいで太ることができなかったという。また異常なまでの寒がりであった（室内での執筆に帽子をかぶり，厚いコートを着ている肖像画もみられる）[12]ともいう。それにもかかわらず84歳の長寿をまっとうすることが出来たのは，幸いにも呼吸器系統だけは丈夫であったためであるらしい。このように虚弱な肉体をもった人が，一生をかけて精力的に仕事をし続けたことに感嘆の念を覚えずにはいられない。

---

6) R. Mauzi, S. Menant, M. Delon, *Précis de littérature française du XVIIIe siècle*, P. U. F., 1990, p. 102.

7) Nicolas de Largillière, Voltaire à vingt-trois ans, Couverture de *D'Arouet à Voltaire*, Voltaire Foudation, 1985.

8) Maurice Quentin La Tour, Voltaire à quarante et un ans, Couverture d'*Avec Madme Du Châtelet*.

9) Jean Hubert の描くヴォルテール像は数多くあるが，例えば
R. Pomeau, *Voltaire par lui-même*, Seuil, 1955. の中にも幾つかを見ることが出来る。

10) J. Goldzink, *Voltaire, La légende de saint Arouet*, Gallimard, 1989, p. 17.

11) J. Bréhant, R. Roche, *L'Envers du Roi Voltaire*, Nizet, 1989.

12) J, Goldzink, *op. cit.*, p. 117.

バビロンに戻ったザディーグは，不正と戦う最後の機会を得て，並みいる高位高官の人々を前にしてこう言う。「私から奪った美しい白の甲冑を身に着けているこの人物と，私はこの身なりのままで自分の剣をもって闘う用意がございます」(第十九章)。ところが兜を被り，鎧を着て，腕鎧をつけた卑劣なる相手に立ち向かうザディーグの身なりたるや，ナイトキャップを被り，部屋着をまとった滑稽なものであった。これはまさしく病がちであったヴォルテールの日常の姿ではないか。

「まるで潮が満ちたり引いたりするように，深遠な哲学と押しつぶされそうな苦悩とに代わる代わる身をゆだね」(第九章) ているザディーグにとって，なし得ることは幸福になりたいという希望をもち続けることである。「この世で幸福になることはなんと難しいのだろう」と嘆くことは，まさに幸福になりたいと言うことの裏返しなのであるから。ともあれ希望を失わないこと，たとえナイトキャップに部屋着すがたでも戦うことは出来るのだと，ヴォルテールは『ザディーグ』を書きながらみずからを励ましていたに違いない。

(D. 1979　大阪大学言語文化部非常勤講師)

Zadig からの引用文は日本語に直し，引用箇所の章の番号のみ記した。
使用したのは　プレイヤード版である。